

吉次峠の戦

佐々友房

君見^{きみ}ず^みや吉次^{きちじ}の^の陰^{かげ}城^{しろ}より^{より}も^も陰^{かげ}なる^{なり}ぞ
突^{とつ}兀^{こつ}空^{そら}を^を摩^まして^{して}路^ち峠^{とうげ}礫^{れき}

煙^{けむり}は^は龍^{りゆう}を^を高^{たか}瀬^せ河^か辺^への^の水^{みづ}
風^{かぜ}は^は捲^まく^く三^{さん}嶽^{たけ}峰^{ほう}上^{じやう}の^の旗^{はた}

一朝^{いちぢやう}警^{けい}を^を伝^{つた}え^え笑^{わら}て^て相^{あい}対^{たい}す^すま^まに
忽^{たちま}ち^き聞^きく^く千^{せん}軍^{ぐん}万^{ばん}馬^ばの^の声^{こゑ}

硝^{しょう}煙^{えん}と^と為^なり^り丸^{たま}雨^{あめ}と^と為^なる^る
壮^{そう}士^しの^の一^{いち}命^{めい}鴻^{こう}毛^{もう}より^{より}軽^{かろ}し

吶^{とつかん}喊^{こゑ}の^の声^{こゑ}は^は巨^{きよ}砲^{ほう}に^に和^わして^{して}響^{ひび}き
山^{やま}叫^なび^び谷^{たに}吼^ほえ^え乾^{けん}坤^{こん}轟^{とどろ}く

砲^{ほう}声^{せい}絶^たる^る処^{ところ}松^{しょう}声^{せい}寂^{しずか}なり^{なり}
一^{いち}輪^{りん}の^の皎^{きやう}月^{げつ}陣^{じん}営^{えい}を^を照^てらす

【作者】佐々友房（一八五四〜一九〇六年）旧熊本藩士、安政元年生まれ。明治の政治家。青雲の志強く明治8

年東京に出て政治の動向に着目、征韓論破れるや西郷隆盛に従い鹿児島に帰伏し、西南の役（明治十年）に西郷軍に従い、敗れて囚となる。創傷治療のため郷里に帰り、済濟齋（せいせいこう）を設けて子弟の教育に当たる。明治二十三年第一回衆議院議員となり政界で活躍した。「時勢論」「戦袍日記」の書がある。明治三十九年没す。年五十三歳。

【語釈】

*君不見…皆さんはご存知でしょう。

*吉次峠…熊本県の西北にあつて植木・田原（たばる）と共に西南の役で官軍と薩摩軍が激戦、十八昼夜に及んだ古戦場。

*突 兀…高く突き出ている姿。 *摩 空…空にまでのびるように。

*崢 嶸…高くけわしい。 深く危険なさま。 *一 朝…にわか。 ひとたび。

*鴻 毛…鳥の毛。 きわめて軽いたとえ。 *呐喊聲…ときの声。 突撃の声。

*巨 砲…大砲のこと。 *乾 坤…天地。 *皎 月…明るく冴えた月。

【通釈】

皆さんはご存知でしょうか。吉次峠の険しいことは城の険しさよりもっと険しく、頂上は大空に突き出て天に達するようであり、路の険しく深いことを。

高瀬川は霧につつまれ、三の嶽の頂上には我軍の旗が風になびいている。

一たび敵襲の知らせが伝わり、何ほどもなかうと笑って待っていると、忽ち千軍万馬の声を聞いた。

硝烟は雲のようになってあたりをたちこめ、弾は雨のようにふりそそぎ、勇ましい兵士たちは我が命を鳥の毛よりも軽いものと思われるほど勇戦奮闘したのである。

突撃の声は砲声と共に響き、山も谷も叫び吼えるように天地に轟き渡った。

やがて砲声もやみ松に吹く風の音もしずかに、一輪の月が明るく輝き、戦い終わった陣営を照らすのであった。

【備考】

この詩は、明治十年西南の役に熊本軍を率いて各地に転戦した作者が、吉次峠から田原坂付近における激戦の状況を詠じたものである。